

聖人と聖遺物

——中世キリスト教と日本仏教の比較の手がかりとして——

中村 生雄

迫害時代の殉教者崇拜

初期キリスト教会において、キリスト信徒とは、イエスを神の子と〈証言するもの〉であり、またイエスの復活を〈証言するもの〉であった。また同時に、殉教者とは、イエスを神の子と〈証言〉し、またイエスの復活を〈証言〉したために、みずからの生命を奪われたものをさした。したがって、キリスト信徒と殉教者とを分かつのは、ただ一点、殉教者がその〈証言〉によって生命を絶たれたという事実のほかにはなかった。そのため、当初は「殉教者 martyr」と「証聖者 confessor」とは厳密に区別されることになつたのである。そもそも、martyrの語がギリシャ語の「証人 marturos」に由来していることが物語るように、殉教の本質はその〈証言〉にこそある、と見なされていたのである。

したがって、イエスを救い主とする〈証言〉によってその証言者が生命を失ったか否か、は二次的な問題だとする見方も可能であつた。重要なのは生死の別ではなく、その〈証言〉であり〈ことば〉なのだ、と。というより、迫害時代の過酷な情況のもとでは、キリスト信徒たることの〈証言〉は、遅かれ早かれ生命を奪われるべき既定の道筋に身をおくことであつたから、「今日の証聖者は明日の殉教者」というのが常態だつたということだろう。

ところで、キリスト教における聖人崇敬は、紀元二世紀まで遡るとされている。そして、聖人崇敬にかんする最古の文献として残っているのが『ポリュカルポス殉教記』であつたことから容易に推測できるように、聖人として崇敬の対象となつたのは、初めは殉教者にかぎられていた。ポリュカルポスは紀元一五五年ごろ小アジアのスムルナの地で殉教した司教であつたが、そのポリュ

カルポスが異教徒から受けた審問の経過と殉教の模様が死ののちまもなく記録され、『ポリュカルポス殉教記』の名で伝えられてきたのである。その記録によれば、彼の忌日には多くのキリスト信徒たちが彼の墓所に集まって祈ったことが知られる。そのため、これが聖人崇敬の文献的初見とされてきたわけだ。しかし、ことわるまでもなく、このような殉教者にたいする追悼行為はこのとき初めてなされたのではなかったらう。なぜなら、信仰をともにしながら無残にも生命を奪われた仲間を悼み、その墓所で祈るのは、キリスト信徒にかぎらず、ごく自然な人間の振る舞いだったはずだからである。

さて、殉教者と証聖者とのあいだには、上に見たように〈証言するもの〉として何のちがいが認められなかった。にもかかわらず、初期教会における聖人崇敬は殉教者にたいする崇拜として始まった。それはなぜかと言えば、おそらく初期キリスト信徒のすべてが、殉教という〈死〉の形式、あるいは殉教によって流された〈血〉そのものに、たんなる〈証言〉や〈ことば〉とは異なる特別な意味を見出したからである。言い換えれば、そのとき彼らは、殉教者の〈死〉と十字架上のイエスの〈死〉とを重ね合わせて見ていたのであり、そのような〈死〉を我が身に引き受けた殉教者の〈からだ〉と、十字架上で息絶え、そして三日のちに天に上げられたイエス・キリストの〈からだ〉とのあいだに、何ほどかの共通点を感じとっていたに相違ないのである。

このように、初期キリスト教会における聖人崇敬が殉教者崇拜にほかならなかったという事実は、殉教者の〈死〉という出来事が聖人崇敬の核心にあったことをしめしている。そこで崇拜されたのは、死にのぞんでもみずからの〈証言〉を翻さなかった信徒の強靱な信仰心だというよりも、より端的に、その〈証言〉に殉じて起こった彼の〈死〉そのものだったのであり、そのような〈死〉をみずから受容した彼の〈からだ〉なのであった。そのことは、ポリュカルポスの例を引くまでもなく、聖人崇敬がつねに殉教者の遺骸（「宝石や金銀よりも貴重なもの」）を葬った墓所で行なわれたこと、しかもそれが行なわれたのが殉教者の忌日であったという事実によっても容易に知りうるどころだ。墓所という場所、忌日という時、この二つの条件がそろわなければ、そもそも聖人崇敬そのものが成立しなかったとさえ言えるだろう。そして、死者の墓所で、死者の忌日に行なわれる宗教的儀礼とは、一般的には死霊祭祀という通文化的祭儀にほかならない。

いずれにせよ、聖人崇敬もしくは聖遺物崇敬が〈死〉と密接に結びついていたことは、その後のローマ教会の聖人崇敬の歴史を見れば明らかである。さまざまな曲折をへて制度化されていった聖人崇敬の典礼において不可欠の要件は何であったかと言えば、それは聖人たちを葬った墓所、もしくはその墓所の上に建てられた聖堂という〈空間〉、あるいはその墓所から聖人たちの遺体——すなわち聖遺物——の一部もしくは全部を移送した別の聖堂の祭

壇という〈空間〉と、彼らがこの世での生命を終え天に生まれた日である忌日という〈時間〉とであった。すなわち、後世の聖人崇敬をになったのは、その聖遺物を保持し、その聖人を自分たちの守護聖者と仰ぐ司教区や都市という聖俗の共同体であり、そしてその共同体の時間は、諸聖人の忌日を一年の暦のなかに祝日として配置する教会暦によって全面的に規制されていたのである。

このような聖人崇敬の組織化の動きは、六世紀から十世紀にかけての長期にわたってつづけられたが、そのさい司教たちがとりわけ意をそそいだのは、先行していた殉教者（聖人）崇拜を事後的に認可するにあたって、殉教者（聖人）たちの遺骨を取りあげ（*elevatio*）、それを聖堂内に移す（*translatio*）儀式を典礼として整備することであり、またその記念日を毎年の祝祭日として司教区内に定着させることであった。そして、このような聖遺物にたいする厳粛で華やかな扱いが、やがては列聖式の形式として定まっていたのである。³⁾

ステファノの殉教

よく知られているように、『使徒言行録』は助祭ステファノ（*ローステファノス*、*英ステイヴン*、*仏ニティエンヌ*）の死を原始教団で初めての殉教として特筆している。偽証人の告発によって最高法院に引き立てられたステファノは、そこで大祭司らを前に最後の説教を行なって彼らの罪を手厳しく糾弾し、激昂した聴衆

の石打ちによって凄絶な殉教死を遂げるのだが、ルカは、その死の場面の描写をステファノの〈ことば〉を交えて次のように記す。

「ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立つておられるイエスとを見て、『天が開いて、人の子が神の右に立つておられるのが見える』と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。

（中略）人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』と言った。それから、ひざまずいて、『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』と大声で叫んだ。ステファノはこう言

って、眠りについた。⁴⁾

このステファノの殉教がのちのパウロの回心の伏線ともなっているのは周知のことだが、それはさておき、死にのぞんで見せたこれらのステファノの振る舞いと〈ことば〉が、これにつづく殉教者の範型となったことは疑いない。ステファノはここで、前項で述べたようにイエス・キリストの復活を「証言」し、さらにみずからの霊の行方をキリストの手にゆだねたのである。彼が最初の殉教者の榮譽をかちえたのは、その「証言」と引き換えに〈死〉を得たからにはかならない。そして、そのようにして実現した〈死〉であったからこそ、彼の霊はその望みどおり天上のキリストによって受け入れられたというのが、ここでルカが語ろうとし

た殉教のストーリーなのだ。つまり、ルカがステファノの死の場面⁵に託して述べようとしたのは、たんに殉教という特別な「死」をめぐって繰り返らばれた悲劇的かつヒロイックな情景にとどまるものではなかった。そうではなく、ここでは、ステファノの「死」がキリスト信徒たることの「証言」、具体的には天上に現前する復活のキリストを目のあたりに見たという「証言」を直接の因として生じたこと、しかも、そのような「死」と引き換えに彼の霊はキリストの手にゆだねられ、天上での「再生」を果すことになったという言わば「殉教」の救済論が、ルカによってしめされているわけだ。

こうして、キリスト教会の第一殉教者となったステファノではあるが、彼にたいする崇敬はその死のち即座に始まったのではない。というより、頻繁に殉教の血が流されていた迫害時代には、逆に第一殉教者ステファノの名は記憶の片隅に追いやられていたというのが実情だったらしい。ステファノ崇敬は、キリスト教公認から一世紀をへた四一五年に、エルサレム郊外のカバル・ガマラでその遺骨が発見され、また彼の殉教の地と見なされたエルサレムのダマスクス門に皇帝妃エウドキアが教会を建てることよって始まった。聖遺物の発見者はルキアヌスという名の司祭だったが、彼は夢で、ステファノを葬った当事者であるガマリエルから遺体のありかを告げられたとされる。そして、彼の聖遺物はコンスタンチノープルをへて、五六〇年にローマの聖ロレンゾ教会に

移送され、そこからさらに、ステファノ崇敬のひろがりとともにヨーロッパ各地に分散していくことになったのである。

ところで五世紀初めに起こったこのステファノ崇敬の当初の熱狂ぶりや奇跡の数々については、アウグスティヌスが「神の国」に書きとどめている。晩年のアウグスティヌスが司教職についていたカルタゴ近傍の町ヒッポにも、ステファノの聖遺物は発見後まもなく運び込まれたが、アウグスティヌスは、ステファノの聖遺物によって生じた奇跡について、たとえば次のように記す。

マルティアリスというキリスト教に敵意をいだいていた高官が死に瀕していたとき、信徒であった娘たちがステファノ記念堂で祈り、祭壇の花を持ちかえって父の枕許においておくと、翌朝にわかには司教を招くように命じて洗礼を受けた。しかもそのとき彼は、「キリストよ、わたしの霊を受けてください」と語ったとアウグスティヌスは述べ、そのことばが殉教時のステファノのことばと一致することを驚きをもって記している。またあるとき、母親の呪いのために身体の震えがとまらなくなった兄妹がヒッポにやって来て、まず兄がステファノの聖遺物のままで祈ると震えはたちどころに止まった。彼は、それを見て感動した群衆とともにアウグスティヌスのもとを訪れて感謝の接吻をした。後日おなじ奇跡が会衆の面前で妹の身にも起こったという。そのほかアウグスティヌスは、牛車に轆かれて死にかけていた子どもが、ステファノ記念堂に運ばれると息を吹き返したばかりか傷あと一つ残

らなかつたとか、瀕死の修道女の聖衣を記念堂におさめ、それで再び修道女の身体を覆うと蘇生したとか、さらには、病気で死んだ少年の身体にステファノの聖油を塗ると生き返ったというふう

に、当時の北アフリカ地域を駆け抜けたステファノの奇跡を克明に記載するのである。こうして最初の殉教者ステファノの聖遺物をめぐる奇跡の数々を記したあと、『神の国』の著者は、殉教の意味を次のように述べている。

「しかしこれらの奇跡として、キリストが肉において復活し、その肉と共に天に昇ったと伝える信仰を確認する以外の何であるるか。というのも、殉教者とはこの信仰のために殉じ、この信仰を証した者をさすからである。(中略)彼らはその信仰のゆえに死んだが、主の名のゆえに殺されたことからして主によって望みを得た。すなわち、信仰のためのおどろくべき忍耐が先行し、それに続いて、このような不思議なわざをうむ力が生じたのである。(中略) いずれにせよ、奇跡とは、永遠の生命に至る肉の復活を告げる信仰を確認するものである。」⁽⁸⁾

ローマ教会史上最大の教父であるアウグスティヌスが、キリスト教史上初の殉教者であるステファノ崇敬の勃興期に際し、目のあたりに生じた奇跡の出来事を報じることになったのは偶然の符合にすぎないかも知れない。だが上に見たように、ここでアウグスティヌスがキリスト復活についての〈証言〉と殉教の〈死〉

との不可分の関係を強調し、さらには、そのような〈死〉をもたらずほどの並みはずれた忍耐こそが、ほかならぬ奇跡の力の源泉だと述べている点は重要だ。ここに見られるアウグスティヌスの見解は、明らかに聖人崇敬の新段階を告げるものであった。

というのは、初期教会の〈証言〉と〈ことば〉を根拠とする殉教者崇敬とは異なり、ここでは奇跡を引き起こす〈力〉としての聖遺物崇敬が前面に出て来ているからである。迫害時代の殉教者崇敬が同信者という求心性の強い結社集団内で行なわれた死者追悼・死霊祭祀の儀礼だったとすれば、アウグスティヌスがその奇跡の数々を目撃したという聖人崇敬・聖遺物崇敬においては、奇跡を引き起こす〈力〉が聖遺物という可視的な〈からだ〉を媒体にして全キリスト教界をおおうことになったのである。このような聖人崇敬の急展開の意味を、思い切って、殉教者の〈ことば〉から発した信仰が殉教者の〈からだ〉にたいする信仰に席をゆずった、と表現することも不可能ではなからう。もちろん先にふれたように、迫害時代の殉教者にたいする追悼行為のうち、血を流した殉教者の〈からだ〉への切実な関心があったことは想像に難くないが、その〈からだ〉はどこまでも殉教者の個性性を離れることのないものであった。ところが、それとはちがってアウグスティヌスは、殉教者が地上に残した〈からだ〉にキリストの普遍的な救済の〈力〉を見たのであり、しかもその〈からだ〉は不屈の信仰によって全地表にゆきわたるべきものとしたのである。⁽⁹⁾

ところで、四、五世紀になって急激なたかまりをしめすことになったこのような殉教者崇拜の実態は、アウグスティヌスの報告が如実に伝えるように、ほとんどが「病氣なおし」と蘇生の奇跡として語られている。そのような傾向を宗教史的見地から解するなら、この期のキリスト教の殉教者崇拜には、アスクレピオスなど古代の異教の治癒神(Heilgötter)が没落したのちの空白状態を補充するという意味があったと見ることも可能である⁽¹⁾。

いずれにせよ、そのような聖人崇敬の新段階を画する特徴が、たとえば殉教者ステファノの聖遺物発見とその移送に見られたような、東方世界における聖遺物の大量発見とその西方世界への流入という事態であった。その類例は文字どおり枚挙のいとまがないが、有名なところでは、コンスタンティヌス大帝の母ヘレナによってエルサレムでキリスト磔刑の十字架が発見され、使徒ペテロがヘロデ王に囚われたとき繋がれていた鎖が見つつけ出され——不思議なことにその鎖はのちにペテロがローマでネロに捕えられたときの鎖と寸分ちがわなかった——、さらにまた、先述の皇帝妃エウドキアがルカの描いた聖母マリア像を見出し、女帝ブルケリアが聖母のマントを発見した、等々というぐあいである。こうして、東方世界からもたらされる聖遺物は、イエス、マリア、使徒たちにかかわるもののみならず、殉教者、隠修士、さらには旧

約の族長たちにかんするものまでが続々と掘り出され、東から西へと運搬される物資の多くが聖遺物で占められる、というような観さえ呈したのである。さながら聖遺物の移送路のごとき東西交通のこのような様相は、数度の十字軍遠征時にピークを極めるまで、一貫して中世ヨーロッパの基調をなしていたのであった。そしてまた、東方の聖地と聖遺物にたいする熱い信仰心のためと並行して、とどまるところを知らない聖遺物の需要に応ずるための窃盗、詐欺、贋造など、ありとあらゆる悪徳と營利行為が聖遺物をだしに横行したことも周知の事実である。

そのような時代の流れに呼応して、殉教聖人ステファヌスにたいする崇敬は、まず地中海沿いのアンコナ、ナポリ、北アフリカにひろがったのちしだいにローヌ川沿いをガリアへと伝わり、さらにブルゴーニュからバイエルン地方へ浸透していった。それらの地域のうちにあつて、聖ステファヌスを守護聖者として奉ずる都市で今日でも著名なのが、サンテティエンヌ(聖ステファヌス)聖堂をもつ中部フランスの古都ブルジュヤ、⁽²⁾聖ジュテファン聖堂をもつウィーンなどである。これら司教座聖堂の場合は言うまでもないが、それ以外にも聖ステファヌスにささげられた聖堂・教会は大小無数にあり、それらの献堂式のいずれにおいても、荘重なセレモニーとともに聖人の聖遺物が祭壇下に納められ、さらに毎年(12)の祝日には聖遺物の奉持と行列をふくむ祝祭が聖遺物フェ

事情はむしろ、ステファヌスにかぎらない。ほかの著名な聖人たち、たとえば使徒の聖ペテロ、聖パウロは言うにおよばず、殉教者では聖ラウレンティウス、聖セバスティアヌス、聖女アグネス、司教ではミユラの聖ニコラウス、トゥールの聖マルティンなどの場合でも、聖遺物の移送とそれにもなつて生じた数々の奇跡とともに、その崇敬は中世の全ヨーロッパを席捲した。さらにその勢いは実在の聖人とどまらず、神話的存在である天使にまでおよんだ。その筆頭は何と言つても大天使ミカエルにたいする信仰で、五世紀末に南イタリアのモンテ・サンタンジエロ近くのガルガーノ山上において羊飼いたちのまえにあらわれるという出来事のと、ミカエル崇敬は一挙に高揚した。ミカエルは悪魔ルキフェルを天から突き落とした戦闘的な武神として、また臨終の人間の祈りを神にとりつぐ代願者として、中世キリスト教の聖人崇敬の一翼をになうことになつたのである。またこの聖天使は、八世紀初頭になるとフランス西部の小島にあらわれ、そのちこの地がモン・サン・ミッシェル寺院としてヨーロッパ最大のミカエル巡礼の聖地となつていたのであつた。

詳細を論ずる余裕はないが、大天使ミカエルの例が雄弁に告げているように、ここに見られる一連の聖人崇敬には多神教の匂いが芬々としている。ミカエルが戦いの神として崇拜されたのとおなじように、他の聖人にも特定の救済の〈能力〉が認められ、たとえばペテロは囚われから解放されるための、ラウレンティウスは

火傷から身を守るための、アグネスは貞潔をつらぬくための守護聖者——すわち守護神——として信仰されたのである。そのような守護のはたらきは、ペテロはヘロデ王に囚われたとき天使によつて救出され、ラウレンティウスは鉄格子の上に横たえられて焙り殺しにされても動じず、アグネスは高官からの求婚を死をもつて拒み、みずからの純潔を守つたというぐあいに、それぞれの聖人の故事にちなんで守護の適性が分担されたのであつた。もちろんこういつた聖人の守護の〈能力〉というものは、教義的にはおのおの聖人に属するものではなく、彼らの代願を通じて神から与えられるものだと言はれたもの（諸聖人の通功 *Communio sanctorum*）、信仰の実態においては、さまざまの聖人が民衆のもろもろの祈願に応える神々として崇拜されていた事実は疑うべくもないのである。

新しい多神教

以上見てきたように、初期キリスト教の殉教者崇拜が、一般的な死霊祭祀の要素をもちながらも、〈証言〉と〈ことば〉というキリスト教独自の宗教理念に根拠をおくものであつたのにたいし、その後の聖人崇敬・聖遺物崇敬においては、具体的な力を秘めた聖人の〈へからだ〉（聖遺物）にたいする信仰が支配的となつた。そのような信仰の推移をさして、〈ことば〉のうちに見えざるカリスマを感じた初期キリスト教が可視的な〈へからだ〉をカリス

マの容器と見なす中世キリスト教に移行した、と評することも可能だろう。殉教者崇敬における殉教者の「へからだ」が、たった一回かぎりのキリストの復活という出来事を無二の前提とするものであったとすれば、中世キリスト教の聖人崇敬・聖遺物崇敬は、おのおのの聖人の個性にみちた信仰的関歴と、それをめぐって語り伝えられてきた奇跡物語の多様性を地盤に生成したのである。言い換えれば、十字架上で死んだ主の「へからだ」は、今や無教に分割されたおびたしい聖人の「へからだ」を媒体として、全ヨーロッパのすみずみにまで行きわたることになったのだ。

そのような動きの大筋を、砂漠に生まれた一神教がヨーロッパの農耕社会に自生した多神教的信仰を包摂していく過程と見てもいいし、あるいは、教会によせられる救済の要請が増大し多様化するのに応じて、教会の側が聖人の守護神化を通じてきめ細かな救いの手だてを講じていった過程と見てもよからう。いずれであれ、そのような中世キリスト教の展開過程において、キリスト教の世界観および救済観念が複合的・階層的な性格を深め、その複合的・階層的な性格の形成が中世封建社会の成立と熟成に緊密な対応関係を有するものであったことは喋々するまでもないところだろう。中世キリスト教の神観念は、それゆえ、この聖人崇敬・聖遺物崇敬という巧妙なチャネルが開かれることによつて、ゲルマンの自然神とオリエントの治癒神のいずれとも完全には断ち切られることのない多義性と柔軟さを獲得し、それを武器にヨーロッパ

パ全域をその版図に収めていったのである。

そのさい見落としてならないのは、十字軍遠征を契機に増大した東方世界からの聖遺物の大量流入に呼応して、逆にヨーロッパ社会の内部からもキリスト教界の聖人の多くが輩出することになり、⁽¹³⁾東方世界や古代ローマ世界に聖人・聖遺物の補給をたよっていたそれまでのヨーロッパ諸国が、聖人・聖遺物の一方的な輸入国であることをやめたという点である。そこでは、言わばヨーロッパ根生いの聖人・聖遺物を自前で調達できる態勢が確立し、封建領主の在地支配に即応した聖人・聖遺物の供給システムがととのえられることになった。⁽¹⁴⁾私見によれば、ヨーロッパ世界のキリスト教化にとつて最重要の課題がこのような自前の聖人・聖遺物供給システムの形成にあったことは間違いないが、その問題に立ち入るスペースはもうない。

ところで、このようなヨーロッパ中世の趨勢にかんしては、院政期から中世前期の日本仏教において隆盛をきわめた祖師崇拜と舍利信仰との対比を通じて、より生産的な考察が可能となるはずである。言うまでもなく、日本仏教における祖師崇拜は最澄・空海ら平安仏教の開祖、および親鸞・日蓮ら鎌倉仏教の開祖を典型として、そのほか古くは行基から鎌倉旧仏教の重源・叡尊などもあふんで、ひろく日本仏教の民衆的基盤をささえる土壌となってきた。⁽¹⁵⁾また一方、舍利信仰は仏陀の遺骨を納めた仏塔にたいする信仰を起源として中国・朝鮮經由で日本にもたらされ、やがて

舍利が王法・仏法双方の權威を統一的に象徴する呪物となつて、中世日本の聖俗兩界に舍利フェティシズムとも呼ぶべき現象を生んだのであつた。⁽¹⁶⁾

中世の日本仏教において顯在的となつたそのような動きを中世キリスト教の聖人崇敬・聖遺物崇敬との比較を通じて詳細に検討するのは他日を期し、さしあたってここでは、そうした比較研究のための予備的な見通しとして、これら二つの聖者崇拜の基礎的な比較対照項目を大づかみに表示して、稿を閉じることにする。⁽¹⁷⁾

キリスト教と日本仏教の聖者崇拜に关する比較対照項目

	〔キリスト教〕	〔日本仏教〕
聖者(聖人と祖師) 1 教義上の性格 2 信仰上の性格 3 前身 4 救済力の性格 5 性別 6 出身家系	神に救済をとりつぐ代願者 守護神(守護聖者) 人間界から天上界に靈の再生を果したエリート	仏の変化・神仏の化身(権者) 生き仏・生き神 神仏の変化・化身で、人間界に下降してきた救済者 万能の救済力
聖者の形象化 1 圖像の性格	記念物	生けるがごとき生身像
	聖人輩出家系あり 女性の聖人が多い 門化	原則的に男性のみ 法脈・血脈相承

2 聖遺物との關係	圖像と聖遺物は別置	仏舍利と同様に遺骨・遺髪を胎内に納入
聖遺物と舍利	聖靈の宿る神殿 代願の対象 奇跡を生む力 みずからの所在を明かす	仏陀の遺骨・牙齒 仏塔崇拜の対象 仏の超自然的力 奇瑞によって感得される
1 教義上の性格 2 信仰上の性格 3 効能 4 出現時の特徴 5 分割の様態 6 保存の形式 7 象徴性 8 社会的な反応	人為的な分割・分譲 公開・原型保存 聖俗の權威のシンボルとして誇示される 贖作・盜難の対象	自然に分布する(数がふえる) 秘藏・自然の増減にかす 王法・仏法のシンボルとして秘藏される 贖作・盜難の対象

(1) 証聖者とは、初期教会の迫害時にあつて敢然とキリスト信仰を告白したものうち、生命を失ふことになつたものをいう。ただし、迫害で殺された殉教者との区別は明確でなかつた。デキウス帝の迫害で拷問され、それがもとで衰弱死したと見られるオリゲネスなどがその適例とされる(『キリスト教大事典』参照)。

(2) ローマ・カトリックにおいては、神にたいする「礼拝」(latra)と天使および聖人(聖遺物を含む)にたいする「崇敬」(adlatra)とは厳密に区別される。したがつて小論では、カトリック教会史上にあつた個々の聖人・聖遺物の崇拜を指す場合には、「聖人崇敬」「聖遺物崇敬」の呼称をもち、聖職者およびその遺骨・圖像などにたいする崇拜一般を比較思想的観点から論ずる場合には「聖人崇

拜「聖遺物崇拜」の語をもちいることにする。ちなみに、カトリック教会が認める聖母マリアにたいする崇拜は *hyperulia* であって *dulia* の特例にすぎないから、これも公式には「マリア崇敬」と呼ばれる。

- (6) Otto Wimmer u. Hartmann Melzer, *Lexikon der Namen und Heiligen*. S. 15.
- (7) 『使徒言行録』7・55—60.
- (8) Jacobus Voragine, *Legenda aurea* (前田敏作他訳『黄金伝説』)
- (9) *Lexikon der Namen und Heiligen*. S. 763ff.
- (10) アウグスティヌス『神の国』第二十二卷第八章(松田禎二他訳『アウグスティヌス著作集』第十五巻).
- (11) 同、第二十二卷第九章.
- (12) 『神の国』第二十二巻でアウグスティヌスが記すカルタゴ近辺の殉教者崇敬とその奇跡には、ステファノの例のほか、プロタシウス・ゲルヴァシウス崇敬、大迫害時代のローマの二十人殉教者にたいする崇敬にかんするものがある.
- (13) 殉教者の流すへ血の救済論上の意味について、『神の国』は次のように述べる。「この神の力によって、あれほど多くの、あれほど大がかりな迫害の恐怖と反対論にもかかわらず、復活がまずキリストにおいて起こり、次にキリスト以外の方において新しい時代がはじまるために起こったこと、および肉の不死のことが不屈の信仰をもって信じられ、人間の顔を恐れずに宣べ伝えられ、そして殉教者の血によってまかれた種は全地のおもてに発芽して成長するに至ったのである」(第二十二巻第七章)
- (14) Ernst Lucius, *Die Anfänge des Heiligenkults in der christlichen Kirche*. S. 252ff.
- (15) おおかたの聖人の祝日はその忌日、つまり聖人の霊の帰天の日とされるのが通例であったが、聖ステファヌスの場合は、もとよりル

カの記録に殉教の日付などなかったから、当初はルキアヌスによって聖人の遺骨が発見された八月三日が祝日とされた。が、それがやがて十二月二十六日に変更される。その理由は、イエスの死ののち最初に殉教したステファヌスの祝日として、イエス降誕の翌日「それがやわわしいと知られたからである」。

- (16) Stephan Beissel, *Die Verehrung der Heiligen und ihrer Reliquien in Deutschland im Mittelalter*. Zweiter Teil, S. 49ff. 拙稿「中世ヨーロッパの心と形」⑥—アンデマックス(『春秋』三一五号)参照。
- (17) 『日本仏教の祖師崇拜については、中尾堯「聖者崇拜と祖師信仰」(『仏教と日本人』4、所収)、同「鎌倉時代の民衆宗教——祖師信仰の伝統」(『仏教と日本人』10、所収)、小林剛『俊乗坊重源の研究』などを参照。
- (18) 日本の舍利信仰については、影山春樹『舍利信仰——その研究と史料』、橋本初子『仏舍利勘計記』解題——東寺伝来の仏舍利関係史料(同上所収)、河田貞『仏舍利と経の荘嚴』(『日本の美術』二八〇)、阿部泰郎『宝珠と王権——中世王権と密教儀礼』(講座東洋思想)16、所収)、細川涼一「王権と尼寺——中世女性と舍利信仰」(同「女の中世」所収)、田中貴子「仏舍利相承系譜と女性」(『日本の女性と仏教』会報)4、所収)などを参照。
- (19) ここでは、中世キリスト教と日本仏教の(聖人と聖遺物)にかかわる特徴的な相違点と思われるもののみを、両者の聖者崇拜の実態面を中心に対照させた。
- (20) (なかむら・いくお、日本思想・比較宗教、静岡県立大学助教)